

群 教 セ	G09 - 02
	平27.257集
	英語 - 中

まとまりのある英文を読むことが できる生徒の育成

——英語を英語のまま理解しやすくするための
授業展開の工夫を通して——

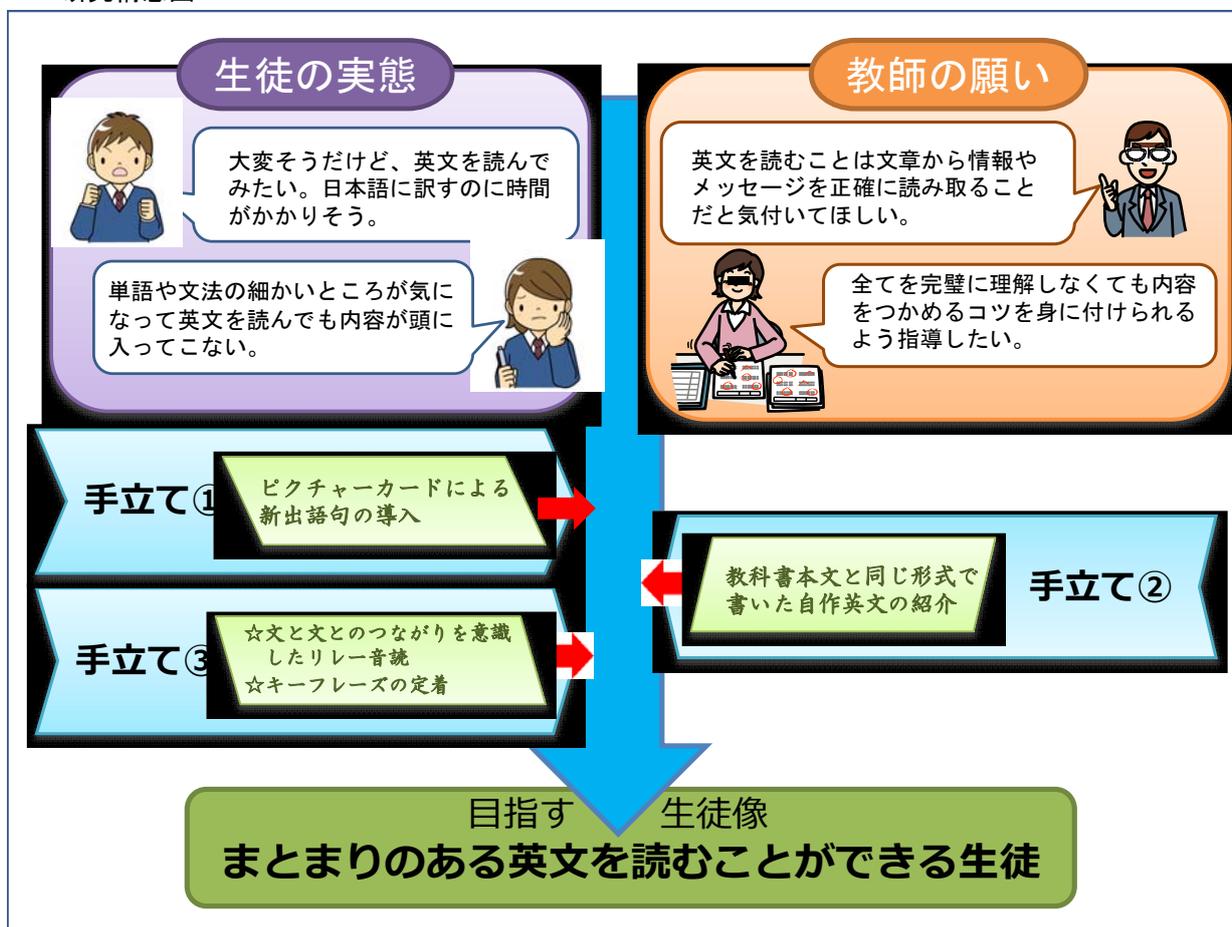
特別研修員 朝香 弘恵

I 研究テーマ設定の理由

自分の英語の授業を振り返ると、教科書本文の単語の意味や新出言語材料を確認してから音読し、1文ずつ日本語に訳すことを「読む活動」としてきたように思われる。所属校の実態を調査したところ、全校の8割を超える生徒が長文を読むことを一番苦手としていることが分かった。どうしたら内容が理解できるようになるのか戸惑う生徒も多く、自分の授業を改善することで「英文を読む」＝「日本語訳をする」という生徒の固定観念を変えたいと考えた。「はばたく群馬の指導プラン」の外国語「まとまりのある英文を読む」を参考に、生徒の長文読解の力を効果的に伸ばす工夫を考えた。まとまりのある英文を読む場面では、句や段落のまとまりを意識して概要をつかませて、文章の形式によって異なる読みの視点を与えながら大切な部分を正確に押さえさせる活動を取り入れる必要がある。まとまりのある英文を読むことに対して生徒に自信を持たせるためには、語句の意味を一対一対応で覚えるのではなく、意味をイメージできるような支援を行い、最低限の文構造を理解した上で文章の大意を把握することを奨励する必要がある。また、英文の内容把握に基づく言語活動をまとめの場面に設定することで、他の技能の向上や学習意欲の持続に繋がると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) ピクチャーカードによる新出語句の導入

覚えやすく、忘れにくく、思い出しやすいことがメリットにある。楽しく効率的に語句を身に付けることができ、英文を読むのに役立つ。そのため、新出単語の導入の時に、生徒にピクチャーカードを提示しながら、綴りと発音を同時に意識させながら音読練習をする。また、絵を見ながらイメージを膨らませて覚える。

(2) 教科書本文と同じ形式で書いた教師の自作英文の紹介

生徒の興味・関心を引きつける身近な話題を教科書の内容と関連付けてイラストと共に英文で紹介し、教科書本文の読解に入りやすくする。また、最終的に生徒にも作品を制作させることを予告し見通しを立てさせることで、生徒の英文読解への集中力が高まり、授業への主体的な参加が見込まれる。

(3) 文と文とのつながりを意識したりレー音読やキーフレーズの定着

英文を一度に理解できるサイズに区切って意味を取ること、英語の語順のまま左から右へ読み進めることができる。英語の文構造に慣れ親しむ前は、文の書き出しからピリオドまで1語ずつ意味を取りながら最後まで読み、結果として文全体の読み取りに失敗する生徒もいる。少人数のグループを作り意味のまとまりごとに区切って順番に音読していくことで、レーのように意味を連結して1つの文を成立させる。この体験によって、生徒は文の中に意味のまとまりがあることに気付く。区切る上でのルールに慣れるまでは大変だが、最低限の語彙や文法を身に付けた上で繰り返し行えば、自然に/（スラッシュ）を入れて区切ることができるようになる。1語ずつ追いかけることのストレスから解放され、英文を読むことの楽しさに気付くようになる。また、本文中の重要表現を同じ文構造の別の表現と入れ換え繰り返し読み込む活動を取り入れることで、句のまとまりや意味の切れ目に習熟する。本文の内容から発展した別の英文にしたり、フレーズを変えるトレーニングで文法や語法の知識が定着する。

実践1では、本文の内容を四つの場面に分けてピクチャーカードで提示することで、話の大筋など題材の大切な部分を正確にとらえて読み取れるよう工夫する。実践2では、英文の大まかな内容を把握できたかどうか確認するため、簡単な英語の設問を用意する。発問のレベルはあくまで本文の難易度に合わせ、正解することで読みの視点を持って読むことができたと評価する。これが生徒の自信に繋がり、学習意欲も持続する。これらの実践を通して、生徒は英文を1文ずつ日本語に訳すことが必ずしも有効ではないことに気付き、概要をとらえて読むことの有効性を実感するものとする。

III 研究のまとめ

1 成果

- ピクチャーカードによる新出語句の導入により、単語の意味や内容をつかむことに慣れた。生徒は比較的長い英文を読むことに抵抗感がなくなった。
- 単語を一つずつ追いかけることなく、意味のかたまりを押さえることで読みのスピードが向上した。
- 似たような表現が出てくることに気付き、句のまとまりごとに区切って読み進めることにより、大切な部分がどこなのかを理解できるようになった。
- 単語の確認から本文の音読まで内容把握のための空所補充を帯活動にして、本文に触れる機会を多く設定したことで、生徒は安心して英文の読解に臨むことができた。また、教科書の本文を用いて、それを活用して何ができるのかを生徒に提示した後に活動を取り入れたことで、生徒が「自分にもできそうだ！」という見通しが持てるようになった。

2 課題

- 教科書レベルの英文は読めるようになってきたが、初見の英語長文となると意欲的に取り組める生徒はまだ少ない。段落ごとに分けて読むなどスモールステップを設けたり、教科書の題材に関連する別の英文を紹介したりして苦手意識をなくしていきたい。
- 話の内容に対して感想や考えを述べたり、本文を参考にまとまりのある英文を書いたりする活動がある程度時間をかけて取り組ませることで、英文を読む力を更に伸ばすことができると思われる。

<授業実践>

実践 1

1 単元（題材）名 「Program 3 “The 5 Rs to Save the Earth”」 Sunshine 3（第3学年・1学期）

2 本単元（題材）及び本時について

本題材は、地球の環境を守るために日常の身近な場面で何ができるかを具体的に考えさせる内容である。武史とリサの会話を通して、一般に知られている4 R (Refuse, Reduce, Reuse, Recycle) に加えて自分たちの生活を見直す上で必要な5つ目のRについて考える。本文のセクション1と2は対話文であり、セクション3は身近なエピソードに基づいた環境に対する意識を発信するメール文である。

本時では、題材を通して既習表現を用いた英文の確認を行い、それらを活用することで定着に向かう流れを作った。最初に本文の音読練習をする。その中で、生徒にとって読んでいて「難しかった」「意味が読み取れなかった」箇所を全員で共有する。本文を読み取るためのポイントを教師が英語で説明する。口頭の英語だけでなく、掲示物を使って生徒の理解を支援する。本文の内容について大体読み取ることができた段階で、生徒が読み取ったことをノートに書き込むよう指示する。授業の最後に、この単元で筆者が伝えなかったことを3文程度で表現することを目標とした。

3 授業の実際

題材を読み取るために、「話す」「聞く」活動を取り入れた。新しい表現を学習するための場面で、絵や掲示物を用いて生徒に語りかけ、表現に慣れ親しむことができるよう工夫した。教師が絵を指し示しながら本文の概要を英語で聞かせてイメージをつかめるようにした。その後、教科書本文を見ながらCDの音声を聞き、音読練習をして本文に触れる機会をできる限り多く取った。Read & Look upをしながら読んだり、4人のグループを作って順番で1文ずつ読ませた。音読を十分にした上で、内容を読み取る活動に入った。

また、本文中の対話場面を絵で4つに分けたワークシートを作成し生徒に配付した。紙芝居形式で進行しながら4枚の絵カードで示された場面についてQ&Aを行い、そのやり取りの中で生徒が大まかな内容に気付くことができるようにした（図1）。大切な部分を正確にとらえ、まとまりのある英文を読むことができている実感を生徒に持たせる。発問する教師と答える生徒だけのやり取りで完結しないように、グループ内でも相談しながらクラス全体で内容について考えることができるよう呼びかけるなど、他の生徒の参加意識を高める発問の仕方も工夫した（図2）。



図1 ピクチャーカードとミニ黒板を使って提示

教師:最初の絵は、自転車が壊れている絵だね。
A:じゃあ、The other day I found that the chain on my bike was broken.の場面かな。
B:2番目の場面は、壊れたから新しいのを買ってもらえるって思ってる。だから、I thought, "How lucky!" at that time.だね。
C:3番目は、修理してるね。
He repaired it for me.
D:4番目は、何かに気付いた感じ。
I think "repair" is the 5th R.
A:起承転結の話になっていたんだね。

図2 グループ活動の発表場面でのやり取り

ワークシートは、それぞれの絵で示されている場面に適する英文を教科書から抜き出して書けるようにした。抜き出したものをグループで確認し合い、積極的に意見交換を行った（図3）。エコ活動で大切なことに気付かせるため、場面の様子を絵と文で結び付けて理解が深まるようにし、グループ活動の中で気付いたことを共有できるようにした（図4、図5）。グループでの活動を円滑に進める上で、4人は有効な人数であった。



図3 4人グループでの活動



図4 まとめをみんなで共有

"What is important to do for the earth?"

A: We can do 5Rs.
 B: We can repair.
 C: We can refuse.
 D: We can recycle.
 E: We can reuse.
 F: We can reduce.
 T:なぜA班は5Rsにしたんだろうね。
 A:伝えたかったところは、本文の一番最後にあったよ。
 → We must remember these **5 Rs** if we really care about the earth.
 このところを読んだら、ここだなと思ったんだ。

まとめると…

➔

いろいろなRが出てきたね。だから、
We can do 5Rs.

図5 グループで考える活動の発表の様子

4 考察

- キーワードやキーフレーズを音読練習で終わらせるのではなく、ポイントになる単語や句のまとまりを掲示することは生徒がその意味を記憶に定着させるのに効果的であった。
- 説明文において、特に中心となる事柄など大切な部分をとらえることができるようにするために、ピクチャーカードを場面に沿って提示したことは、生徒が目的意識を持って主体的に授業に参加する支援となった。読み取るべき内容が明確になり、何回も本文を読み深めようとする事ができた。ピクチャーカードの活用は、段落ごとに概要を理解しようとする意識が高まり、大まかな話の流れをつかむための手立てとなった。
- 生徒の自己評価カードで「大切な部分を見つけて理解することができた。」「文だけだとなかなか難しいけれど、場面の絵があったのでイメージがつかみやすくなった。」「文の中に大事なところがあるって分かった。」「一人じゃ分からないけれど、みんなですべてできたからやれた。」という表現が見受けられた。グループで読み取る活動を行うことで英文の内容把握がより身近なものとなり、生徒に達成感を味わせると共にまとまりのある英文を読むことに対する生徒の意欲を引き出すことができた。今回の授業をきっかけに、多様なものの見方や考え方を題材とする英文を読む機会を増やし、読み取りを基に自分の考えを発信する場を設定していきたい。

実践 2

1 単元（題材）名 Program 6 “Let's Talk about Things Japanese” Sunshine 3 (第3学年・2学期)

2 本単元（題材）及び本時について

本題材では、日本の文化を英語で紹介する場面を取り扱う。自国の文化についての知識を持っていても、それを英語で表現することになると、戸惑ってしまう生徒は少なくない。相手の文化にそれに対応する概念がない場合は訳語を充てることはできず、説明を加えることになるが、既習事項を駆使して、中学生レベルの英語でどのように的確にしかも分かりやすく伝えられるのかを考えることが大切である。日本文化の発信という題材は、生徒の興味・関心が高い。

本時は、まとまりのある英文を読み取る活動を中心に行う。まず、本時で取り扱う内容の説明を聞き、興味を持たせ、単語の意味の確認をする。次に、本文を黙読した後、音読練習を行う。さらにその後、本文の空所補充や本文の内容を表した絵を見ることで、生徒が自然と同じ内容に何度も触れる機会を作る。本文を読み取るためのポイントについて、教師が英語で説明を行う。口頭説明だけでは難しいので、前時の学習内容を想起させるような言葉を掲示物を使って気付かせていく工夫をする。その中で「話の流れ」などヒントになるものに気付かせ、おおよその読み取りができるにしたがって、生徒たちが自発的にワークシートに書き込んでいけるようにする。

3 授業の実際

(1) 本時の学習課題（後置修飾の使い方）をつかみ、追求の見通しをもつ。

授業冒頭で、教科書本文のスタイルを基に教師が作成した日本文化の紹介を行う。1枚のボードに関連する写真を貼り、生徒に提示した（図6）。本文の内容把握の後に、冒頭で説明した英文を示し、本文を基にして作成したものが一目で分かるようにした。（図7）。



図6 ボードを提示しながらモデル文を紹介

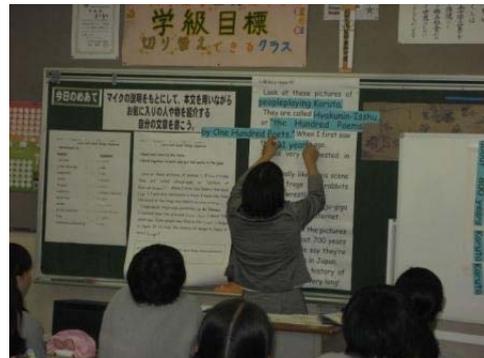


図7 本文がモデル文になることを視覚的に説明

(2) 読み取る活動

新出単語の導入の後に、単語と日本語の意味が理解できているのかを確認するために点と点を結ぶワークシートを用意する。正解した数をポイントにしてゲーム形式で競わせる。十分に単語に慣れ親しんだ後に、一度に理解できるサイズのフレーズに区切って意味をイメージしながら音読する。4人1組になってリレー音読をすることで、英語のリズムに乗って最後まで読み進め、句のまとまりや文と文のつながりを意識した読みとなる（次頁図8）。

キーフレーズが定着しているかどうか確認するために、教科書本文の空所を補充するワークシートを利用する（次頁図9）。音読練習の反復を通して生徒は句のまとまりがあることに気付いており、教科書などヒントに頼らず自分の力で選択肢から適切な答えを探すことができた。

内容把握の後、本文中の重要表現を同じ文構造の別の表現と入れ換えて自分でまとまりのある英文を作ることができるワークシートを配付する。（次頁図10）。この作業は、まとまりのある英文を読むことができたことの証明になり、将来自由英作文に挑戦するための素地を作ることにもなる。

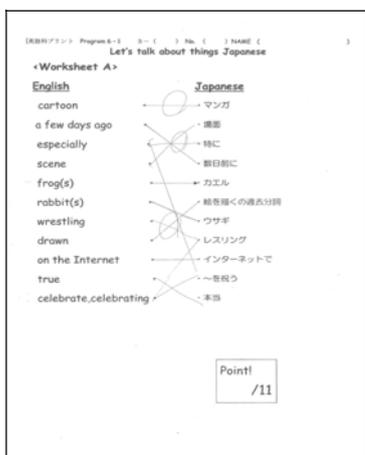


図8 単語の確認

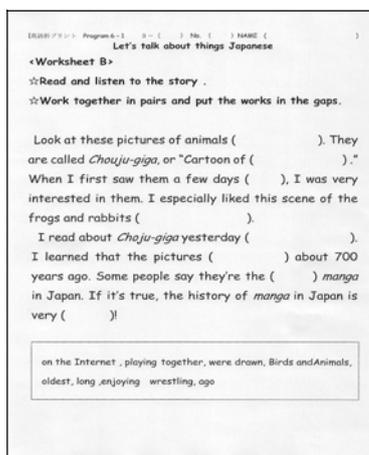


図9 本文の空所補充

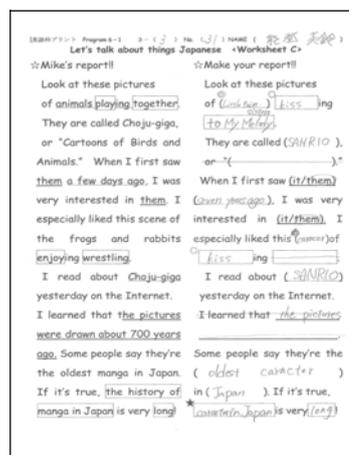


図10 自分のレポート作り

(3) 教科書本文内容に関するQ & A

大まかな内容が把握できたかどうか確認するため、簡単な英語の設問を用意する（図11）。発問はあくまで本文の表現を軽くアレンジしたレベルで行い、正解することで読みの視点をもって読むことができたと評価する。

(Questions)	(Answers)
○ What animal is this?	• It's a rabbit!
○ What is the rabbit doing?	• Playing sumo.
○ What pictures was Mike interested in?	• Chouju-giga.
○ What Chouju-giga is?	• It's a manga.
○ Which scene did Mike like?	• He likes the frogs and rabbits enjoying wrestling.
○ How old is Chouju-giga?	• It's 700 years old.

図11 内容把握を確認するための簡単な設問

4 考察

- 単語の確認や本文の穴埋めなどの帯活動を継続し、本文の内容把握を確認するため平易な英語でQ & Aを行ったり、本文の重要表現を用いてレポートを作成させたりして生徒の学力状況に合わせて段階的に取り組ませることは、生徒の英語を読む力を育成するのに有効であった。
- 単元終末に他の生徒の前でレポートを発表する機会を設定するなど活動の見通しを持たせることで、生徒の授業への参加率が以前より上昇した。自分で英文を書くために教科書本文の重要表現に触れる回数が増えた。文構造を理解しようとする生徒の意欲の高まりが確認できた。
- 1コマの授業にいろいろな要素を盛り込み過ぎると、教師主導の授業になってしまう可能性が高い。一部の生徒だけでなく全ての生徒が参加できるようなレベル設定をしたり、生徒とのコミュニケーションでは、クローズドクエスチョン（Yes/Noで答えるもの）とオープンクエスチョン（5W1Hで答えるもの）をバランス良く採用したりすることで、変化をもたせることが求められる。生徒の回答・発言に対する教師の反応についても、相槌やYes/Noで答えるだけでなく、生徒の読み取った内容に合わせて掲示物に線を引いて他の生徒に見せたり、答えた生徒の声を拾った後でもう一度教師の正しい英語を聞かせるようにしたりするのが生徒を支援するのに効果的だと思われる。
- ペア活動で聞いて反応を返す活動から、4人のグループ活動で読んで反応を返す活動まで行い、2技能の統合〔受容（読む）から発信（書く）への流れ〕が成功した。
- 教師が教科書本文を参考に自作したモデル文を見せる場面において、本文の交換可能な表現の上に教師の英文を書いた青いカードを貼ったことで、どの部分をどのように置きかえればよいのか生徒が容易に理解することができ、自分で英作文をする上でのハードルが低くなった。